Rikkyo Psychological Research
2003, Vol. 45, 39-49

原　著

# 人格発達に影響する志向性に関する研究動向：自我理想概念を中心に

立教大学大学院文学研究科心理学専攻　若原まどか[1]

**A Review of Studies of the Influence of Intentionality on Personality Development with particular reference to the Ego-Ideal.**

Madoka WAKAHARA (Graduate School of Psychology, College of Arts, Rikkyo University)

The purpose of this paper is to review theories about and studies of the influence of intentionality on personality development, to clarify the concepts involved, and to derive proposals for future studies. Theories about the ideal self and the ego-ideal , and recent empirical studies and investigations of these concepts are reviewed. The meaning of Rogers's theory (1951) of the ideal self is reviewed and problems in recent studies are pointed out from the point of view of the study of the personality development. Further, it is argued that although the concept of the ego-ideal (Freud, 1914, Blos, 1962, Erikson, 1959) had a good influence on personality development theories, it has rarely been used in recent empirical studies or investigations. It is suggested that the ego-ideal concept needs to be employed in future studies.

Key words : intentionality, ego-ideal, ideal self, personality development

## はじめに

Erikson, E.H. (1950) が，“彼らは最終的同一性の保護者として，普遍の偶像や理想をいつでも喜んで受け入れようとするのである”と指摘するように，青年期に明確な理想的目標を持つことは，アイデンティティ形成の支えとなることがあるだろう．また，主体的に理想的目標を持つことができるかどうか，そしてその目標に対する姿勢は，人格形成と関わると考えられる．理想的目標を主体的に持つことで，自らの人格発達の目指す方向を，本人が意識化することができ，そのため，人格形成が促進される可能性があると考えられる．さらに，具体的な理想目標を持たない場合でも，その前駆として，その人の人生全体を方向づけるような志向性が存在すると考えられる．志向の字義は，“心が一定の目標に向かって働くこと”（広辞苑　第五版，1998）である．さらに現象学では，“意識は常に具体的な何ものかについての意識であり，意識がその何ものかに向かっていること”（広辞苑　第五版，1998）と示されている．本論文では志向性を，人格特性の働きとして“生き方全体が方向づけられていること，またその方向性”と定義する．また，「～であらねば」とリジッド[2]に構える場合，理想的目標に縛られ，主体的で柔軟な生きかたを選べないこともありうる．

このような志向性を持つ主体の特徴，一般的な言葉で記述すれば，「～でありたい」という志向性のありかたが他の人格特性とどのように関連するか，という点について述べている理論および研究は，①理想自己（ideal self）に関するもの，②自我の構造（超自我［super-ego］，自我理想

[1] 本論文執筆にあたり，ご指導を賜りました立教大学の大野久教授，貴重なご意見をいただきました西平直喜先生に深く感謝いたします．

[2] 性格的に硬い，融通がきかない（cf. rigidity）．

[ego-ideal]）に関わるもの，に大別されうる．①では，Rogers，C.R.（1951）の理想自己概念に始まる諸研究が挙げられる．Rogersは，人間が発達する過程で，理想的目標を志向することができるような人格の健全性や，現実自己が理想自己に近づきつつあるという認識と健全性との関連性を示し，それらについて，さまざまな議論がなされてきた．この概念では，理想的目標（理想自己）は，臨床場面におけるクライエントの情緒状態はもちろんのこと，セラピーを通してクライエントが変化すること（成長や成熟）と関連するものとして扱われてきた．また②では，Freud，S.（1914，1932）やBlos，P.（1962，1972，1985）による自我理想概念，Erikson（1950）の漸成発達理論における主導性や理想我/自我理想（ego-ideal[3]）（Erikson，1959，1968），西平直喜（1996）による自我理想型人格・超自我型人格に関する理論的枠組み，Horney，K.（1950）による“べきの専制”（tyranny of the should）についての概念などが挙げられる．

しかし，そのような理論的検討が多くなされているにも関わらず，志向性と人格形成との関連という視点を持つ実証的研究は，歴史が浅いと思われる．例えば，理想自己概念は操作的に定義され，これまでに多くの研究がなされているが，調査研究という形で人格形成との関連で扱われだしたのはごく近年である．また自我理想概念に関しては，種々の理論的考察において定義の多義性が目立ち，実証的研究においてほとんど扱われてこなかった．そこで本論文では，志向性を持つ主体の特徴について述べている理論および研究について概観し，概念整理を行い，今後の研究課題について述べる．

## 自我発達に影響する志向性を扱う諸理論

### 1．理想自己概念に関する理論

まず理想的目標への志向について扱っている理想自己概念について概観を示す．

#### 1-1．Rogersの理想自己概念

Rogersによれば，“理想的自己（ideal self）または自己理想（self ideal）とは，個人が，非常にそうなりたいと望んでおり，それにもっとも高い価値をおいている自己概念のことを意味する”（1959）．またRogers（1951 b）は臨床的経験から，理想自己が現実自己の評価の枠組みとなると考え，現実の自分と理想との差が大きいとき，自分が理想像へ到達していないと感じ，その結果自己評価が低くなり，不適応を起こすことを示している．また，Rogers（1951a，1959）は，理想自己は測定できることを示し，理想自己を含む自己概念について，“少なくとも部分的には，...操作的な用語で定義しうる”（1959）と述べている．また臨床場面で“現実自己と理想自己の重なりを適正な水準に回復させ”ると，主観的に“一致した感覚”が増加し自己受容が促進され，結果として適応状態を改善できると記述している．つまりこの理論によれば，実際の自分に対して高すぎる理想像を持つことが問題となる．高すぎる理想像という指摘は，後述するHorney（1950）の“べきの専制”の概念と類似している．またこのRogersの記述から，次の，Higgins（1987）の自己不一致理論が生まれた．

#### 1-2．自己不一致理論

Higgins（1987）の自己不一致理論（Self-Discrepancy Theory：以下，SDTと略す）によれば，どのような自己指針を用いて自己評価するかによって生じる感情が異なる．その際，理想的目標としての自己は，理想自己，義務自己の2つが操作的に定義される．Higgins（1987）によれば，理想自己は“その人自身もしくは重要な他者から理想的に所有して欲しいと求められていると感じる所属性の表象”であり，現実自己（real-self）と一致しない場合には落胆と関連した感情（失望，不満，悲しみなど）を感じさせる．一方，義務自己（ought-self）は“その人自身もしくは重要な他者から義務的に所有しているべきだと求められていると感じる所属性の表象”であり，現

[3] ego-idealという語は，訳により“自我理想”“理想我”などと異なる記述がなされているが，英文では同じ語が用いられている．なお本論では文献の表記のまま引用した．

実自己と一致しない場合，動揺と関連した感情（恐怖，落ち着きのなさ，緊張など）を感じさせる．

この理論は，Rogers（1951）の自己の不一致に関する理論から，理想自己・義務自己，現実自己を操作的に定義するもので，この定義を用いて動機づけ研究や臨床場面への応用がなされてきたと思われる．それらの努力によって応用可能性は拡大された．その手続きはSD法や自由記述などを用いて，理想自己や義務自己，現実自己を被面接者に具体的に認識させ，理想自己もしくは義務自己と現実自己との距離を測定し，それらを個人間で比較するものである．またこの理論では，理想自己や現実自己が発達的に変化していくことが想定されていない．前述したように，Rogersは人格変容や発達について臨床的視点から検討しており，個人内の理想自己に近づいたという主観的認識の変化に焦点をあてている．その意味で，人格発達という視点からみると，Higginsの理論を用いた研究では，Rogersが本来求めたものは得られないのではないかという危惧があると思われる．

**1-3．研究における適用と問題点**

Higgins（1987）をはじめとした，様々な研究（遠藤，1992，1993；水間，1998；小平，2001他）が示されている．Higgins（1987），遠藤（1992，1993）などは，理想自己の知覚が自他認知にどのような影響を与えるのかという点について検討している．遠藤（1992，1993）は，理想自己は，正の「～なりたい」であっても，負の「～なりたくない」であっても，自己認知に影響を与える可能性を示した．基本的にこれらの研究は，理想自己を自己評価基準や自己制御の行動指針，認知対象として扱っている．

一方，理想自己概念について，特性的側面や自己形成との関連で扱う研究も見られる．ここでは，特性としての理想自己・義務自己へのaccessibilityの高さを扱った小平（2001）の研究と，自己形成意識と理想自己の関連について，理想自己の主観的水準（困難度）や主観的実現可能性などの変数を用いて検討している水間（1998）の研究を紹介する．

小平（2001）は，理想自己と義務自己の両者に焦点を当て，特性としてどちらを意識する傾向が強いか（accessibilityが高い）という点について検討し，尺度化（下位尺度は“義務目標”“理想目標”）を行っている．その際，2つの目標の弁別基準として，“時間的展望性”が用いられている．“義務的な目標を意識・設定しやすい傾向（義務目標傾向）は，目標を比較的近い未来に設定し，常に自分の想定する水準を満たしておこうとする傾向，現在の状態に対して神経を使い，その自分の状態を守ろうとしている傾向”であり，“理想的な目標を意識・設定しやすい傾向（理想目標傾向）では自己指針を構成する記述やイメージが「こうありたい」とされる傾向が強く，自己に関する目的の実現をより遠い未来に設定し，自分が目標の自分であることを「望ましい」と考えている状態”と定義されている．

一方水間（1998）は，自己形成的側面と理想自己－現実自己間の距離との関連について検討している．水間（1998）は，Rogers（1950）の研究の意義として，高水準の理想自己を，現実自己との解離から否定的にとらえるだけでなく，“人間が自ら価値あるものへと成長していく存在であるとする彼［Rogers］自身の能動的人間観を実証的に検討した点”を指摘し，個々人の“理想自己の意味”として，理想自己と現実自己の距離の大きさを自己形成意識との関わりでとらえようとした．具体的な手続きは，①理想の自分（10個自由記述），②それらの理想が現在の自分に当てはまる度合（7件法），③理想自己の水準（困難さ），④理想自己の実現可能性，⑤自己形成意識の一部（“達成動機”“努力主義”とまとめられた項目＋$\alpha$），⑥自己評価尺度（Rosenberg，1965）を測定している．その結果から，①理想自己と現実自己とのズレは自己評価と負の相関があるが，②その理想に実現可能性があれば，理想自己水準の高いほど，自分自身の可能性を追求することが示された．結果①については，理想自己と現実自己の差得点を扱って比較しており，後述する，Rogersが指摘した“自身統制群”の問題は解決されてい

ないと考えられる．しかしこの研究によって，一様に扱われる傾向があった理想自己概念の質的な意味について検討する必要性が指摘された．なお今回のレビューにおいては，国外における研究で，理想自己と人格形成との関連について検討した研究は発見されなかった．今後そういった研究が望まれる．

ここで，先行する理想自己研究について，概念の扱いかたや研究の視点などについて指摘したい．特に，Rogersの理論に関して，重要であると考えられるが，先行する実証研究の中では，これまで見落とされてきたと思われる点を中心として指摘する．(a) 人格発達の視点：Rogers (1952) は，クライエント中心療法の過程において，クライエントに起こる変化の有無とその様相，また変化の理由についての検討を試みた．その研究計画には，クライエントの全体的なパーソナリティの変化を研究すると同時に，そのことと“改善された適応”や“成熟”との関連の検討が盛り込まれている．彼の研究の成果からは，完全な“人格の成熟”や“パーソナリティの統合”は示されなかったようだが (Rogers, 1954)，人格の成熟や発達の概念がその理論の根底に存在していると思われる．しかし，Higgins以降の理想自己研究には，その観点は少ないように思われる．仮に，人格発達の視点を明確にするならば，次のことが言えると思われる．つまり，大野 (1996) が指摘するように，分析単位を小さくすると，尺度構成や測定が簡便になるという長所はあるが，その人の人生全体，あるいは人格全体にとっての意味を汲み取る情報が失われる可能性もあると考えられる．人格発達との関連をみるならば，理想自己のあり方がどのように形成されるか，またその後どうなっていくかについて一生を通した視野を持つ研究も必要となるだろう．(b) “自身統制群own control group”の問題：確かにRogersは“理想自己は測定できる”と記述しているが，Rogersが関わった実証的研究 (Donald, 1954) における研究デザインでは，“自身統制群”が用いられている．“自身統制群”とは，縦断研究を行い，セラピィ前，セラピィ後，フォローアップ時の3回に渡って，理想自己と現実自己に対するクライエントの主観的な知覚を測定し，それらの相関を見るものである．Rogers (1952) は，異なる人（ある統制群の人とあるクライエント）のパーソナリティやセラピィに対する欲求を実質的に比較できないとしている．理想自己と現実に知覚される自己との主観的な距離が，本人の中で縮まったときには，確かに適応へ進んだのではないかと推測できるが，他者との距離を比較しても，各人にとっての距離の意味は異なるかもしれないのである．Rogersの概念に忠実に基づくとすれば，多くの被調査者の差得点を測定し，その平均得点を比較するのではなく，理想自己と現実自己が一致する度合の主体的感覚としてとらえ，その個人内における変化について検討する方が，より変数の誤差が入りにくい研究デザインとなろう．例えば，Rogersが述べる，主観的な“一致した感覚”という変数を扱う．(c) 研究対象者の問題：あくまでも理想的目標（理想自己や義務自己）という概念を測定の一基準として用いると，理想的目標を持たない場合の人格特性のありかたについて検討できないことになる．例えば，「こうなりたい」という目標が明確でなかったり，イメージ化できない場合でも，その人が日常生活の中で，あるいは人生の岐路において無意識に選択がなされる際に舵の役目を果たすような，その人生全体を方向づける志向性は存在すると思われる．そういった志向性は，選択をしている段階では意識化できずとも，その人生を方向づけ，後に人生を振り返ったときはじめて意識化される可能性もある（若原，1999）．またそのありかたがリジッドで，特に誰かに命令された訳でなくても，何かにつけて「つい，～しなければならない」と思ってしまい，強迫的な感覚を持つ青年も存在する．またそのリジッドさは，理想的目標に対するありかただけでなく，その人の生活全体を彩る人格特性として存在し，毎日の生活感情としても「～しなければならない」という感覚を持つ傾向が存在する（若原，2002a，2002b）．そういった意味での志向性においては，

目標の具体性，困難度，実現可能性とは別の次元として，「『～すべき』と思ってしまう」「自然に柔軟に『～したい』という気持ちや判断の方が強い」という人格特性があるのではないかと考えられる．そのような，志向性を持つ本人が具体的に理想目標として記述できない働きまで含めて検討するには，理想的目標を研究の主軸に置くのではなく，こうした人格特性について検討することが，人格発達を検討する上で有益だと考えられる．

## 2．自我理想概念を中心に扱う理論

次に，自我発達という視点から，志向性について扱っていると思われる自我理想概念について検討する．自我理想は精神分析の概念であるので，行動や態度，感情の理由（因果関係）や形成過程，さらにどのような人格を形成していくのかという生涯発達的な視点から研究を行う際に，有効な概念だと考えられる．

### 2-1．Freudの自我理想に関する記述

自我理想について初めて言及したのは，Freud（1914）である．彼は，自我理想（ego ideal; ideal ego）[4] について，①自我を見張ること（監視），②あるべき理想像や規範を示すこと（理想提示），③示した理想に対して，自我がどの程度到達したかなどを測ること（評価）などの機能を示している（1932）．

超自我と自我理想の関係については，“明確で一貫した区別はFreud自身もしていないが，彼自身によって使い分けられたことも現実である”との指摘（芳賀，1981）がある．使い分けが明確でないという点についてみると，例えば1923年の著作では，単純に2つの機能の違い（超自我：“良心・道徳律の機能”，自我理想：“青年に取るべき行動の方向性や指針を与える”機能）として扱っているが，1932年の著作では，自我理想は，超自我の3つの機能の1つ（他2つは，内省self-observationと良心conscience）として扱われていた．このように発言に若干のぶれは見られるものの，使い分けはなされている．

またFreud（1914，1932）は形成プロセスについて指摘している．超自我は，両親の超自我を模範として内在化された権威による禁止であり，“懲罰のおそれに由来した同一化”である．一方自我理想は，主観的に完全な両親に対する同一化とナルシシズムとの融合物である．

以上のように，Freudは，自我に関する概念を提唱した当初，防衛的自我について述べていたのであるが，後年になって，後述する自我心理学の流れの概念である“自律的自我”（Hartmann，1958）に近い，自我の主体性に着目していたのではないかと推測される．このようにFreudは，志向性のもちかたというよりも，超自我，自我，イドの心理力動として超自我や自我理想の概念について語ったのであるが，検討すべき概念を提示したという意味で，その後の理想的目標と人格形成との関連についての諸理論に大きな影響を与えたと言えよう．

### 2-2．Blosの自我理想に関する記述

Freudの自我理想概念に対して，詳細な検討を行っているのは，Blos（1962，1972，1985）である．Blos（1962）もまたFreudと同様に，“自我理想ego idealは自我の分化した部分であって，…超自我に似た指導的役割を持つ．しかしそれは超自我より個人的であり，また頑固な暴虐さと原始的な残酷さのないことで区別される”とし，超自我的機能と自我理想的機能の違いについて言及している．またBlos（1962）によれば，超自我が，エディプス期に両親の禁止と要求を内在化し形成されるのに対し，自我理想は，“同性の親との同一化”と“幼少期のナルシシズム”に源泉を持っている．これらの考えは，Freudの概念を色濃く受け継いでいるものと考えられる．

Blosの自我理想に関する理論展開の独創的な点は，分離個体化の概念をあわせて考え，心理的分離を通して，自我理想が成熟すると考えた点であり，また特に息子の父親との関係について，臨床的事例などから詳細な検討を行った点であろう．

[4] Freudのすべての著作を網羅して検討したわけではないが，概観した結果，Freudはego idealとideal egoの2つの語を明確に使い分けているのではなく，曖昧に用いている．そこで本論では，両者をほぼ同じ対象を示す語として扱った．

幼児期的自我理想，つまりFreudが言うところの権威の期待・愛情にこたえることに由来する同一化とナルシシズムとが結合してできあがった自我理想を持っている時期は，自己愛的であり，原始的同一化した親への愛情もやはり自己愛的である．次にエディプス期を通過する段階で，“主体と対象の区別を無視する原始的同一化は，特色，価値，態度というような抽象化された部分対象との同一化におきかえられる”（Blos，1962）．やがて思春期になると，親との心理的分離（“第2の個体化”）を通して，他の対象（同性）へ一時的に愛情や同一視の対象を移し，この過程で超自我の機能を“統合”する．最終的に，“超自我の非合理な性格を欠いており，自我親和的”であり“行動をしっかりと導き，統合や自尊心，自己愛の感覚の守護者として奉仕する”（Blos，1972），“成人期的自我理想”へと変容すると示されている．Blosの理論は臨床事例に関わる青年を中心に検討を試みたのであり，その後のほかの研究者による検討も少ない（皆川，1980）ため，概念設定などの点で，現代青年の健全な人格発達に関わる研究に直接応用するには難しい点もあると思われる．しかし，健全な人格発達と自我理想との関連について，心理力動的な側面から検討するための有用な示唆が得られる理論だと考えられる．

**2-3．Eriksonの概念**

精神分析から自我心理学の流れをくみ，またアイデンティティ理論の提唱者であるEriksonは，漸成発達理論図（epi-genetic chart）（1950）の中で，人格形成の主要な要因の1つとして主導性と罪悪感の主題を指摘し，さらに超自我と自我理想（ego-ideal）との関係についても言及している．

主導性は，“良心”（超自我）を形成させる時期のエディプス期の主題である．前の段階で得た“自律に対して，さらに仕事を引受け計画し‘果敢に取り組む’”（1950）役割をになう．Eriksonが何度も主張していることであるが，対として示されている罪悪感，――主導性を発揮して“計画した目標や実行した行為に関して，罪悪感を抱くこと”（1950）―― と主導性とのバランスが大切であり，その後社会生活を営む上でどちらも重要なのであるが，“少し主導性の感覚a sense of initiative”の方が上回っている方が良い．ここでは明確に超自我と自我理想との関連として述べられていないが，Eriksonのこの記述は，仮に超自我と自我理想を想定したとき，どちらの形成も人格発達にとって大切で，なおかつ自我理想の健全な形成が超自我に阻止されないことが重要である，と解釈可能なのではないかと考えられる．さらに，超自我と自我理想との関係についてErikson（1959）は，アイデンティティ形成の基盤となる自我のありかたとして，次のように述べている．“超自我は，個体発生的に早期に取り入れた対象early introjectsと結合して，頑なに復讐的で処罰的で‘盲目的’な道徳として内的に働きつづけるのである．これに反して自我理想は，もっと柔軟に‘特定の歴史的時代’historical periodの理想像と結びついているように思える．すなわちそれは，自我の現実検討reality testingの機能ともっと密接な関係を持っている．…自我理想の空想性は，‘たえず求められ，しかも決して完全には到達され得ない，一連の理想的な目標’を意味するものとして述べることができよう”．この記述から，Erikson（1959）はFreudの超自我の機能と自我理想の機能との区別を反映していることが示され，その点はBlosの記述と共通する．相違点は，Blos（1962，1972，1985）が自我理想の形成の源泉を同性の親への同一視に求め，親からの心理的分離を通して理想像を内在化するととらえているのに対し，Erikson（1959）は，自我理想とは“もっと柔軟に‘特定の歴史的時代’historical periodの理想像と結びついている”ものととらえている点である．Blosの興味関心が臨床領域，つまり葛藤や問題を抱えた青年にあることが素因であろうが，分離個体化の概念も背景にして，幼少期からの心理力動，エディプス葛藤について，BlosはEriksonより詳細な記述をしている．しかし理論展開の中心が，男児とその父親との関係にあり，女児に関しては自我理想の形成や成熟はどのようであるか，という疑問が存在す

る．Blos自身，検討を試み始めている（Blos, 1985）ものの，概念として明確な形になっていない．その点，Eriksonの概念は，より一般的な人格形成の検討への応用可能性が高く，かつ社会との関連も検討できるものであると思われる．

**2-4．超自我概念を扱った理論**

FreudやErikson，Blosなどは，超自我概念と対の形で，あるいは超自我に含まれる機能として自我理想概念について指摘しているが，超自我的なありかたにのみ焦点をあてた理論として，Horney（1950）の“べきの専制”が挙げられる．Horney（1950）は神経症者についての臨床的経験から，彼らは必要以上の「～すべきである」という観念にとらわれていることを指摘している．このありかたが，“べきの専制”である．つまり，“今あるがままのおまえの不名誉な姿など忘れてしまえ．おまえのあるべき姿は実際にここにあり，この理想化された自己になることこそが重要なのだ．…〈べき〉に従属している状態では，…期待にそむく行動をとればすぐさま報復や懲罰が待っている”（Horney，1950）と述べられているように，超自我の規制があまりにも強く，まさに“気息奄奄[5]”（西平，1996）としている状態である．つまりこの場合，志向性を持つことで充実感を覚え，そこに向かって力強く努力まい進するのでなく，目標に縛られ，態度の構えが硬く，到達できないことへの不安や距離を強く感じ，精神的健康を損なう結果となっている．このように同じ志向性を持つ状況においても，前述の，自我理想的，つまり主体的で柔軟なありかたと，超自我的，つまりリジッドなありかたとでは，志向性を持つ姿勢も，それに伴う精神的健康度も異なるのではないかと考えられる．

**2-5．自我理想概念の両義性**

以上述べたように，自我理想や超自我に関する理論は，人が志向性をどのように持ち，それがどのようなアイデンティティ形成に関わるかという点で，青年研究に応用可能だと考えられる．しかしこれらの概念はこれまで難解だとされてきた．その理由の一つとして，自我理想概念の両義性（機能的側面および理想的目標としての対象的側面について）が明確に理解されていないことにより，この概念を測定する上で操作的定義の多義性が生じた可能性が推測できる．Erikson（1968）は，Freud（1932）の発言について次のように指摘している．“フロイドは，‘超自我のイデオロギー’という表現をすることによって，超自我に観念的な内容を付与している．しかしかれは同時に，それを‘担い手’とも表現している”．Freud（1932）は明確にこれらの側面を定義づけた訳ではないが，Erikson（1968）が指摘するように，超自我には機能的側面と対象的側面が存在すると理解できると思われる．また自我理想に関しても同様に，Freud（1932）の“自我は自我理想に照らして自己を測り，これを模倣しようとし，…完全なものになれという自我理想の要求を満たそうと努力します”という記述や，Erikson（1959，1968）の自我理想に関する説明などからこの両義性が読み取れると思われる．

この，自我理想概念における理解の混乱と操作的定義の難しさについて，具体的な研究の手がかりを示唆する理論を示したのが西平（1996）であろう．西平は，自我理想や超自我そのものではなく人格のタイプとして，以下の理論を示している．

**2-6．西平の理論**

西平（1996）は伝記分析という手法を用い，ある特定の人物の個別分析や，同時代かつ同じ生育環境の複数の人物の比較分析を行い，人格的特徴，生育歴，その後のアイデンティティを含めた人生のありかたなどについて包括的に検討した．その結果，“自我理想型人格”および“超自我型人格”について，典型を示すことで概念を提示している．西平は，自我理想型人格について，“自我理想とは，個人の内面で，自我が衝動や超自我と葛藤せず，調和がとれて，共働力となって発動できる，健康なパーソナリティ構造”と述べ，超自我型人格について，“自我は，自己の衝動とも外界とも葛藤することが多く，とりわけ，超自我から，

[5] きそくえんえん；息も絶え絶えで，今にも死にそうなさま（広辞苑　第五版，1998）

「何々すべからず」,「何々を恥じよ」と厳しく命じられ，つねに気息奄々とした状態にある型”（西平，1996）と述べている．さらに西平（1996）は，それぞれの人格の特徴として，自我理想型については，笑い・身体的健康さ・心理的健康さ（自我の強さ）などを，超自我型についてはパーソナリティの硬さなどを示している．

例えば西平（1996）は，自我理想型人格の典型例として福沢諭吉，超自我型人格の典型例として内村鑑三を挙げている．西平（1996）によれば，諭吉は“実に良く笑う人 ... 身体的健康さ ... 心理的健康さ（自我の強さ：ego strength）... バランス感覚，旺盛な活動欲，良い仕事をしたいと願う成長欲”というパーソナリティ構造であり，一方鑑三は，“不安定，不適応，硬く，強迫的，悲観的で，人生の大部分を，パウロとともに「ああ，われ悩める人なるかな」の嘆息を洩らしつつ生きた人”，“頭痛，胃腸障害，不眠 ... 神経症的，心身医学”，“パーソナリティの硬さ ... 非協和的な態度の象徴的できごとが，勅語に対して敬礼を拒否した‘不敬事件’”という特徴があった．また，うそをつくことに対する反応を比較すると，諭吉は“うそをつくのは世の中で一番悲しいこと”であり，“善は自分を幸福にするし悪は不幸にする，だから心して良いことをなし悪いことを避けよ”という心訓を持っているのに対して，鑑三は，“虚言（うそ）はその最小のものでも大罪悪”であり，“絶対的な道徳があり，もし守らなければ，神から罰せられるであろうという，上からの圧力の感じが濃厚”である父訓を持っている．さらに彼らの生育史環境を比較すると，諭吉は“父を早く失い，健康的で暖かい理想的な母親に育てられ”たが，鑑三は“厳格な父親からスパルタ教育を受け，母は冷たく偏愛をもった人で（後年精神病院に入っている），安定した幼少年期をもつことはできなかった”という．前述の自我理想型，超自我型人格についての説明は，これらの特徴を心理力動的に解釈可能にするものであろう．例えば，諭吉は暖かい母親に育てられ自我が健全に育つ基盤が形成され，基本的信頼感も十分に育った上で父親が夭折したために，厳しいエディプス・コンプレックスを持つことがなく，結果として厳しい超自我が育たず，“恐怖や憎悪や嫉妬のない理想像としての父”が同一視の対象として存在した．そのため自我理想型の人格になったという解釈が示されている（西平，1996）．

このように，心理力動性，人格的特徴について具体的かつ明確に述べられているために，この理論の提示によって，自我理想概念についての理解が深まると同時に，調査研究への道がさらに開けるのではないかと考えられる．また，超自我や自我理想，自我の形成・発達についても視野に入っているため，これらの人格の形成プロセスについても，研究の方向性が膨らむと考えられる．

**2-7．自我理想概念のまとめ**

ここまでの理論に共通しているのはおおまかに次の2点であろう．①自我理想とは，人格形成にポジティブな影響を与える志向性を自我に持たせる機能である．②超自我と自我理想を比較すると，超自我は，懲罰的で禁止・抑制の機能を持ち，それが強すぎると自我を縛ってしまい，そのため自我が主体的な志向性を持つことができなくなってしまう．一方自我理想は，自我に理想の方向性を示す機能を持つが，そのありかたは柔軟で，自我は志向する方向性を主体的に選択している．

自我理想型人格と超自我型人格の違いを心理力動的に解釈するならば，自我と超自我の力のバランスや自我のありかたそのものが異なっているために，結果として態度や感情が異なると考えると理解が深まると思われる．つまり，理論的に考察すれば，自我理想が育つような人格形成がなされた場合，柔軟で主体的な志向性を持つことができると考えられる．一方，超自我がリジッドである場合，超自我の要請に縛られ，柔軟で主体的な志向性を発揮することが難しいのではないだろうか．また，自我が脆弱である場合，主体的志向性を発揮する自我のエネルギーも弱いのではないかと推測される．

**2-8．研究における適用と問題点**

臨床領域では，精神分析の概念を，クライエン

トに対するアプローチ方法やケースの解釈に用いている例（柴田，2000；津田，2001）がある．しかしあくまでも臨床事例の精神分析的解釈に用いられている研究であり，一般に実際の青年がどのようであるかという，実態調査的側面は示されていない．一方，人格発達領域における調査研究は，ほとんどない．国外では，Schenenga（1983）が，8学年の男子の道徳性（Defining Issues Test）と自我理想の発達の度合い（Ego Ideal and Conscious Development Test）を測定し，父親不在の男子はそうでない男子に比べて両得点が低いことを示している．しかし2つの尺度の関連は示されず，検討の余地を残す結果となっている．また国内では，Blos（1962他）の理論を用いて，青年の友人関係について検討した調査研究（岡田，1998）がある．これは，Blos（1962他）の自我理想に関する理論のうち，青年期における自我理想の成熟の過程で，同性の親への同一視から同性の友人などへの同一視を経る，という指摘に基づいた研究である．コホート研究を行っており，発達的視点を取り入れている．しかしこの研究は，自我理想という術語を用いているものの，操作的定義として理想自己と現実自己を用いており，理想自己・現実自己研究だと言える．

## おわりに—今後の研究展望

本稿では，志向性と人格発達との関連についての諸理論および研究を紹介したが，筆者は，青年教育，生涯発達という視点を持ちつつ人格発達，自我発達について検討する立場にいるため，中でも，自我理想を持つことができるような自我の形成過程について研究することが必要であろうと考えている．自我理想概念は，心理力動，つまり心的構造における機能的側面という枠組みを理論的に含むため，志向性の性格特性としてのあらわれだけでなく，その背景にある因果関係や形成過程について仮説を形成し検討することができるからである．それらの理解を深めることで，青年の志向性についての理解を促進し，さらにアイデンティティ形成への道のりを推測する手がかりとなる可能性もあるだろう．調査研究を実施する方法としては，西平（1996）によって示された自我理想型・超自我型の人格の定義（特徴）を特性として用いることが有効だろうと考えられる．

今後の展望として，量的・質的研究の両者を用い，それぞれの方法で得られた知見から弁証法的に知見を積み上げていく研究が望まれる．具体的には，筆者は次の研究展望を持っている．

第1に，志向性の持ちかたとして，超自我的・自我理想的（「～すべき」もしくは「～したい」）のどちらの傾向が強いかという視点から尺度構成を行い，量的調査を実施する．そのことにより，超自我的傾向や自我理想的傾向のあらわれとして，志向性のありかたに関する主観的な感覚を，個人内変数としてとらえることができるだろう．また，なぜそのように感じるのか，自我や超自我，イドなどの概念を用いて，心理力動的解釈も可能となる．そのことで，①なぜそのような行動や感情，性格特性であるのか，という理由について理解する枠組みが提示され，②自我や超自我などの概念が提示されるのでそのような行動や感情，性格特性などの形成過程についての仮説が提示され得る．つまり，研究の視点が広がると考えられる．

第2に，志向性の持ちかたが精神的健康とどのように関連するか，量的調査および面接調査などの質的調査を行い検討する．調査の切り口は，志向性を持つことができるような人格のありかたである場合，健全な自我発達がなされており，精神的健康が高いことと関連するのではないか，また「～すべき」という感覚が強い，超自我的なありかたであれば，精神的健康が低いことと関連するのではないか，という点である．質的な検討においては，以下の点が面接調査の切り口となろう．①青年の将来に対する理想的目標の有無・目標以前の志向性の強さ，②①に対するありかた（自然にそうしたいと思うのか，そうしなければと思うのか），③日常生活における意識・態度や判断の傾向（～したいと自然に思うか，つい～しなければならないと思ってしまうのか），④②や③に伴う感情（嬉しい，辛いなど）．

第3に，志向性の持ち方の形成過程や，志向性の持ちかたが，アイデンティティ形成とどのように関連するか，検討する．そのため，青年への面接調査を行い，生育歴（幼少期の親子関係，周囲の重要な他者，家庭の雰囲気，現在までの重要な他者からの影響，時代的影響，本や著名人など理想視の対象となるような対象からの影響など），現在の志向性のありかた（具体性，自我理想的・超自我的），アイデンティティのありかた，の3つの視点から分析する．そして最終的に，ある程度人生を俯瞰できる熟年者への面接調査や，伝記分析などの質的調査を行い，志向性の持ちかたの形成過程について検討し，それらの志向性がどのように変容していくのか，またアイデンティティ形成とはどのような関連があるのか，人生全体という分析単位で検討したい．

## 引用文献


ブロス, P.　野沢栄司（訳）　1971　青年期の精神医学　誠信書房（Blos, P. 1962 *On Adolescence : A Psychoanalytic Interpretation.* Free Press.）

Blos, P. 1972　The Function of the Ego Ideal in Adolescence. *The Psychoanalytic Study of the Child,* **27**, 93-97.

ブロス, P.　児玉憲典（訳）　1990　息子と父親：エディプス・コンプレックス論を超えて誠信書房　（Blos, P. 1985. *Son and Father: Before and Beyond the Oedipus Complex.* New York : Macmillian Publishing Company, Inc.）.

遠藤由美　1992　自己評価基準としての負の理想自己　心理学研究, **63**, 214-217.

遠藤由美　1993　自他認知における理想自己の効果　心理学研究, **64**, 271-278.

Erikson,E.H.　仁科弥生（訳）　1977　幼児期と社会 1・2 東京：みすず書房（Erikson,E.H. 1950. *Childhood and Society.* New York: W. W. Norton.）

Erikson,E.H.　小此木啓吾（訳）　1973　自我同一性：アイデンティティとライフサイクル　誠信書房（Erikson,E.H. 1959 *Identity and the Life Cycle: Selected Papers. In Psychological Issues. Vol.1.* New York: International Universities Press.）

Erikson,E.H.　岩瀬庸理（訳）　1973　アイデンティティ　金沢文庫（Erikson,E.H. 1968 *Identity: Youth and Crisis.* New York: Norton.）

Freud, S. 1914 On Narcissism. Standard Edition, **14**, 73-102. London: Hogarth Press, 1957.

フロイト, S.　小此木啓吾（訳）　1970　フロイト著作集6：自我論・不安本能論　人文書院（原著刊行年次, 1923年）

フロイド, S.　古沢平作（訳）　1969　フロイド選集3：続精神分析入門　日本教文社　（Freud, S. 1932　*Neue Folge der Vorlesungen sur Einfuhrung in die Psychooanalyse.*）

ドナルド・L・グラモン　1967　第3章：第1ブロックの計画，手順および被験者　友田不二男（編訳）ロージァズ全集13：パーソナリティの変化　岩崎学術出版社　（Grummon, D.L. 1954 Chap.3 Design, Procedures, and Subjects for the First Block. Rogers, C.R. & Dymond, D.L.（Eds.）*Psychotherapy and Personality Change Content.* Chicago University Press.）

芳賀純　1981　精神分析　梅津八三・相良守次・宮城音弥・依田新（監修）　心理学事典　初版　平凡社 Pp.484-498.

Hartmann, H.　霜田静志・篠崎忠男（訳）　1967　自我の適応　誠信書房（Hartmann, H. 1958　*Ego Psychology and the Problem of Adaptation.* International Universities Press.）

Higgins, E. T.　1987　Self-Discrepancy: A Theory Resulting Self and Affect. *Psychological Review,* **94**, 319-340.

ホーナイ, K.　榎本譲・丹治竜郎（訳）　1998　ホーナイ全集6：神経症と人間の成長　誠信書房（Horney, K. 1950 *Neurosis and Human Growth.* New York: W.W. Norton.）

小平英志　2001　理想自己・義務自己への意識傾向の測定：自己目標志向性尺度の作成．名古屋大学大学院紀要, **48**, 283-289.

皆川邦直　1980　青春期・青年期の精神分析的発達論：ピーター・ブロスの研究をめぐって　青年の精神病理 2　初版　小此木啓吾（編）　弘文堂　Pp.43-66.

水間玲子　1998　理想自己と自己評価及び自己形成意識の関連について　教育心理学研究, **46**, 131-141

新村出（編）　1998　広辞苑　第五版　岩波書店

西平直喜　1990　成人（おとな）になること　東京大学出版

西平直喜　1996　生育史心理学序説　金子書房

岡田努　1987　青年期男子の自我理想とその形成過程　教育心理学研究, **35**, 116-121

大野久　1996　発達（青年）心理学,人格心理学におけるAs a wholeを分析単位とする研究への提言　発達心理学研究,　**7**,　191-193.

カール・R・ロージァズ　第3章：クライエント中心療法における知覚の再体制化　伊東博（編訳）　1967　ロージァズ全集8：パースナリティ理論　岩崎学術出版社　(Rogers, C.R. 1951a Perceptual reorganization in client-centered therapy. Blake, R.R. & Ramsey, G.V. (Eds.), *Perception: An Approach to Personality*. NY : Ronald Press, pp.307-327.)

カール・R・ロージァズ　1966　第4章：セラピィの過程　友田不二男（編訳）　ロージァズ全集3：サイコセラピィ　岩崎学術出版社　(Rogers, C.R. 1951 b Chap.4. The Process of Therapy. *Client-Centered Therapy? Its Practice, Implication, and Therapy.* Boston: Houghton Mifflin Company.)

カール・R・ロージァズ　1967　第13章：クライエント中心のサイコセラピィ　伊東博（編訳）　ロージァズ全集14：クライエント中心療法の初期の発展　岩崎学術出版社　(Rogers, C.R. 1952 Client-centered psychotherapy. *Scientific American*, **187**, 66-74.)

カール・R・ロージァズ　1967　第15章：本研究の概観と将来への課題　友田不二男（編訳）ロージァズ全集13：パーソナリティの変化　岩崎学術出版社　(Rogers, C.R. 1954 Chap.15 An Overview of the Research and Some Questions for the Future. Rogers, C.R. & Dymond, D.L. (Eds.) *Psychotherapy and Personality Change Content.* Chicago University Press.)

カール・R・ロージァズ　第5章：クライエント中心療法の立場から発展したセラピィ，パースナリテイおよび対人関係の理論　伊東博（編訳）　1967　ロージァズ全集8：パースナリティ理論　岩崎学術出版社　(Rogers, C.R. 1959 A Theory of Therapy, Personality, and Interpersonal Relationships, as developed in the Client-Centered Framework. In S. Koch (Ed.) *Psychology ; A Study of a Science vol.3 Formulation of the Social Context.* New York : McGraw-Hill.)

Schenenga, K. 1983 Father absence, the ego ideal and moral development. Smith College Studies in Social Work, **53**, 103-114.

柴田恵理子　2000　初期成人期の女性の超自我と自己愛の発達をめぐって：対人恐怖を主訴とする一女性の精神分析的精神療法に基づいて　精神分析研究, **44**, 281-292.

津田真知子　2001　青年期女性の母親からの分離に関する一考察：逆転移の検討を中心に 心理臨床学研究, **19**, 1-12.

若原まどか　1999　人格形成に影響を与える対象に関する研究（1）　日本青年心理学会第7回大会発表論文集,　**7**,　19-20.

若原まどか　2002 a　青年期における，志向性の自我理想的・超自我的あらわれ　日本教育心理学会第44回大会発表論文集, **44**, 142.

若原まどか　2002 b　青年期における，志向性の自我理想的・超自我的あらわれ（2）　日本青年心理学会第10回大会発表論文集, **10**, 36-39.